

## 茗溪会公開講座 「単語の並べ方」

平成 26 年 6 月 21 日 (土) 2 時~3 時半 (於: 茗溪会館)

藤原保明

平成 21 年の春に産声を上げた「藤原教授の英語の話」は 9 回目を迎えた。今回は「単語の並べ方」と題して、以下のようなお話をした。

### はじめに

英語では *gold and silver, heaven and earth, to and fro, trick or treat* のように語が 2 つ並列して「A and B」または「A or B」という形式をとる「等位句」と呼ばれる表現が多く用いられる。このような等位表現の構成素の語順に関する原則や普遍性の有無などは興味深いことから、今回の講演では英語と日本語の等位句を取り上げ、2 つの語がどのような原則に従って並べられているのかについて考えてみた。

### 1 英語の等位表現の語順の原則

英語の等位表現の例はイギリスの小説家ジョージ・オーウェルの『動物農場』(1945 年刊) から抜き出した。「A and B」または「A or B」という形式の句のうち、動詞は *She jumped and slipped on the ice.* のように、その意味や語の構造によって順序が決まるのではなく、動作や状態の順序に左右されることから、対象から除外した。

『動物農場』で用いられている 43 種類の等位句から構成素の語順を決定する規則を見つけ出すためには、基準を設定し、それに基づくグループ分けが必要となる。このような例の分類方法として最も簡単で便利なのは、構成素の音節数によって (1) のような 3 つのグループに分けるやり方である。すなわち、等位句の 2 つの語のうち、2 番目の語の方が音節数が多い (1a) のような場合、2 つの語の音節数が同じ (1b) のような場合、最初の語の方が音節数が多くなる (1c) のような場合の 3 つである。(1b) 型は (1a) 型の 2 倍の例があり、(1a) 型と正反対の (1c) 型はわずか 1 例のみである。このことから、等位句の構成素の語順は語の長さとは何らかの関係が

あり、頭でっかちの (1c) のような語順はあまり好まれない可能性がある。なお、(1) の例の括弧内の数字はその句の使用回数を表す。

#### (1) a. A < B (=14 例)

*chaff and mangels, comfort and dignity, correct and original, cows and horses, friends and enemies, geese and turkeys, hunger and overwork, idle and dishonest, old and toothless, picks and crowbars, rats and rabbits, slowly and mournfully, wheat and barley, wise and benevolent*

#### b. A = B (=28 例)

*bit and spur, by and large, clever or simple, day and night (=night and day), ducks and hens (cf. hens and ducks (2)), external and internal, grain and meal, hay and corn, here and now, hoof and horn, manes and tails, misery and slavery, oats and hay (2), once or twice, pigs and lambs, pushing and pulling, rain or shine, red and black, rich and free, thick and green, sheep and cows, sleet and snow, sooner or later (=soon or late), support and pleasure, terror and slaughter, to and fro (5), vanity and ambition, weak or strong*

#### c. A > B (=1 例)

*body and soul*

### 2 言語音の聞こえ度と音節

(1b) の 3 つ目の *clever or simple* という句は一般の英語辞典では 1 音節と考えられているが、正しくは、語末の [l] は音節を構成することから、2 音節語である。それゆえ、同じく 2 音節語の *clever* と等位句を形成していることから、(2b) のグループに入ることになる。

言葉は音波であるから、聞き手は山と谷の起伏のある音の波の情報を手がかりにして音の種類などを識別している。音には聞こえやすいものとそうではないものがある。具体的には、母音は子音よりも聞こえやすく、子音は阻害音(閉鎖音・摩擦音・破擦音)、鼻音、側音、流音、渡り音の順に聞こえ度が高くなる。一方、母音は口の開け方の大きい開母音→口の開け方が狭い閉母音の順

聞こえ度が低くなる。これは「聞こえ度」の階級と呼ばれ、阻害音（閉鎖音→破擦音→摩擦音）→鼻音→流音→渡り音→母音のように右に行くほど聞こえ度が高まる。

### 3 音節数が同じ等位句の語順

(1b) の例はそのままでは構成素の語順の原則を説明する手がかりがつかみにくいので、(2a, b, c) のように、音節数が同じ例をそれぞれ1つのグループに入れてみた。このように分類すると、(2a) のような1音節語の構成素間の比較は容易になる。

(2) a. bit and spur, day and night, ducks and hens,

grain and meal, hay and corn, here and now, など (20 例)

b. sooner or later, support and pleasure, terror and slaughter (3 例)

c. external and internal, misery and slavery, vanity and ambition (3 例)

聞こえ度の階級と音節構造を手がかりにして、等位句の構成素の音節構造を立体的に表すと（ここでは紙面の都合で省略するが）、red and black のように音節数は同じであっても、右側の語の構成素の方が左側のものよりも複雑であることがわかる。この例と同じタイプの語は28例中14例あり、(1a)の音節数の多い構成素が右側に来る等位句と同じ構造であるとみなせる。そうすると、『動物農場』の43例の等位句のうち27例(=62.80%)では、音節数がより多いか、それとも音節構造がより複雑な語を2番目の位置に置くという原則に従って語が並べられているといえる。しかし、それでも、push and pull のように2つの構成素の音節数と音節構造の複雑度が同じ場合が12例、grain and meal のように音節数または音節構造の複雑な語が最初の位置を占める場合が4例、合計16例(=全体の37.20%)は原則に合致しない。このように、4割近い例の語順が説明できないことから、別の原則が関わっているようである。

そこで、次に母音と子音の音声上の特徴から、等位句の語順に関わる原則を探ってみた。たとえば、rain or shine では語頭の子音は聞こえ度の大きい順に並んでいて、push and pull, hoof and horn の2例では、語尾の子音はそれぞれ聞こえ度が「小さい～大きい」という順

に並んでいる。この規則に合致する例を加えると、合計30例(30/43=69.77%)の等位句では構成素が明確な原則に従って並べられていることになる。それでもなお、30%強の例の語順の並べ方の原則が解明できない。

### 4 等位句と凍結句

等位句の例を『動物農場』から採ったことから、動物を2種類並べた表現(sheep and cows)、動物の体の部位(maness and tails)、家畜の飼料(oats and hay)、家畜の装備品(bit and spur)などを並べた句が多く出てくる。これらの例のうち、英語の構造上の特徴から語順を説明できないものは、言語構造以外の原則に従っている可能性がある。牧畜業者ならこのような語の種類や優劣の知識が豊富で、並べ方にも通じているかも知れない。しかし、素人は学問上有効な判断はできない恐れがあるので、これらの例の考察は別の機会に譲りたい。

そこで、今度は(3)のようなごく一般的な英語の等位句を取り上げ、語順の原則について考察してみたい。これらの例についても一定の基準に従ってグループ分けした上で分析するのが望ましいと思われる。そこで、(3a)のbody and soulのように本来は一組の「鍋と蓋」のようなものとして存在し、主たるものが句の最初の位置を占める場合、(3b)のgold and silverのように順序や価値判断が社会通念として定まっていて、好ましいものを最初の位置におく場合、(3c)のeast and westのように空間や方角の捉え方として定まっていて、その順序に単語を配置する場合の3つに分けた。大切なことは、これらの等位句の構成素の順序は英語の音構造に優先することである。たとえば、(3a)のbody and soulの語順はすでに見たとおり音節数に関する原則に反するが、「鍋と蓋」の原則に即したものとして、この語順が優先される。

(3) a. body and soul, bow and arrow, bread and butter, fish and chips, pen and ink

b. boys and girls, father and son, men and women, ladies and gentlemen), friends and foes, gold and silver, heaven and earth, right or wrong, right and left

c. east and west, north and south, far and wide, in

and out, on and off, up and down

## 5 日本語の等位句とモーラ

興味深いのは、(3a) の例の中で英語の語順が日本語では正反対になっている場合が 24 例中 4 例もあることである。そこで、日本語の (4a) のような等位句ではなぜ英語と正反対の語順が生じるのかを考えてみた。ちなみに、英語の語順と同じ語順の日本語の等位句は (4b) に挙げた 5 例である。なお、日本語の例は音読みではなく、訓読みとする。

- (4) a. friends and foes 「敵も味方も」、in and out 「出たり入ったり」、ladies and gentlemen 「紳士諸君、並びに御婦人方、みなさん」、rain or shine 「照っても降っても」、east and west 「西に東に」
- b. body and soul 「身も心も」、north and south 「北へ南へ」、right and left 「右や左に」、up and down 「上がったりがったり」、win or lose 「勝っても負けても」

英語と日本語はまったく別の系統の言語であり、様々な点において異なるが、特に等位表現に最も関係が深い単位が大きく異なる。英語では音節がリズムの単位となっていて、dog, bird, three ではいずれも 1 音節から成り、強く発音される部分が一か所であるのに対して、mother, leader, honest は 2 音節から成り、強弱というリズムを示す。一方、3 音節の beautiful, wonderful, excellent は強弱弱のリズムの型を持つ。これに対して、日本語は「ん」を除いて、母音がなければリズムの単位が形成されない。そのために、英語ではたとえば test のような 1 音節語の場合、日本語では te は子音+母音であるから、そのまま「テ」([tel]) となるが、次の s は単独では存在しえないことから、母音を添えて「ス」([su]) とし、最後に語末の t はやはり母音を添えないと語の一部にはなりえないので、母音を付加して「ト」([tol]) とする。その結果、英語では長さの単位として最も短い 1 音節であった語は、日本語に置き換えると「テスト」となる。日本語のリズムの単位は「モーラ」(mora) と呼ばれ、母音を中心とする長さの単位を形成していて、母音だけでも、子音+母音でも 1 モーラとなるが、母音の

後の [n] (= [N]) は例外的に 1 モーラを形成する。したがって、英語の test を日本語に置き換えた「テスト」はモーラというリズム (または長さ) の単位では 3 モーラの長さがあることになる。

このモーラを用いると、英語の等位句と語順が正反対になったり、英語と同じ語順になる (5) のような日本語の等位句の語順がきれいに説明できる。すなわち、単語の意味ではなく、モーラの数が少ない方が最初の位置を占め、多い方が後にくる。モーラの数が同じ場合には、意味の上で勝っているものが先に来る。なお、括弧内の数字はモーラの数を示す。

- (5) a. friends and foes 「敵も味方も」→敵・味方 (てき・みかた=2・3)
- in and out 「出たり入ったり」→出る・入る (でる・はいる=2・3)
- east and west 「西に東に」→西・東 (にし・ひがし=2・3)
- rain or shine 「照っても降っても」→照る・降る (てる・ふる=2・2)
- b. body and soul 「身も心も」→身・心 (み・こころ=1・3)
- north and south 「北へ南へ」→北・南 (きた・みなみ=2・3)
- right and left 「右や左に」→右・左 (みぎ・ひだり=2・3)
- up and down 「上がったりがったり」→上がる・下がる (あがる・さがる=3・3)
- win or lose 「勝っても負けても」→勝つ・負ける (かつ・まける=2・3)

## まとめ

英語も日本語も、単語はただ雑然と並んでいるのではなく、言語特有の原則に従い、その原則は言語の構造に根差している。もともと、社会通念上の優劣は言語構造上の原則より優先されることが多い。英語のリズムの単位は音節であるが、日本語では指折り数えることのできるモーラが単位となっている。日本語の多くの等位表現ではモーラの数が少ない方が最初の位置を占める。

講演後の質疑応答も楽しいひと時となった。